

『気狂いピエロ』

1965年／フランス／ジャン＝リュック・ゴダール監督作品

追悼 ゴダール

会員 篠原 一廣 (53期)



『気狂いピエロ』
価格 Blu-ray ¥2,200 (税込)
発売・販売元 KADOKAWA

昨年（2022年）は、ヌーヴェルヴァーグの映画作家で唯一存命していたジャン＝リュック・ゴダールが亡くなったという映画史的にも特筆すべき年となった。既に91歳という高齢であったことから、いつ訃報が届いてもおかしくない状況にはあった。ただ、安楽死により亡くなったという報道に接したときは、ショックとともに、いかにも彼らしいとの感慨を抱いたことを覚えている。

そんなゴダールの作品の中でも、『気狂いピエロ』（1965）は最も著名かつ衝撃的な作品の1つであり、「ゴダールの到達点」などとも評される作品である。

ゴダール最初の長編作品であり、かつ本作と並ぶ代表作として知られる『勝手にしやがれ』（1959）のジャン＝ポール・ベルモンド演ずるフェルディナン・グリフォンが、妻に促されて渋谷パーティーに出席するところから本作は始まる。妻が頼んだベビーシッターが、実はフェルディナンのかつての恋人マリアンヌ・ルノワール（演ずるのはゴダールのミューズであったアンナ・カーリーナ）であり、フェルディナンは退屈な日常から逃げだそうと独り自宅に戻り、自宅にいたマリアンヌと一緒に彼女の自宅へ向かう。自宅へ向かう車内の2人を前面から捉えたショットがとても印象的で、色鮮やかな街灯とその影が2人の顔をなぞるようにかすめて過ぎて行く。

ここまでは完全にメロドラマだが、翌朝のシーンから突如として転調する。ベッドで目覚めたフェルディナンは、マリアンヌが刺し殺した見知らぬ男の

死体を目にし、そこから2人の南仏への逃避行が始まる。

逃避行ではあるものの悲壮感は全くなく、むしろ南仏の明るい陽光の下でまるでバカンスを楽しむがごとくの2人。ミュージカルのようにマリアンヌが歌い出したり、フェルディナンが我々観客に向かって語ったりするなど、映画のジャンルを意図的に混ぜ合わせた手法が駆使されている。また、後期の作品で顕著となる様々な文学・絵画などの芸術からの引用もなされてはいるものの、本作ではあくまでもストーリーの進行が第一となっている。この絶妙なバランスこそが、ゴダールのキャリア前半で制作された映画でありながら、未だに彼の代表作とされている大きな理由であろう。そこには、いわゆる「映画好き」を自称する私のような一般大衆をも受容する大らかさが確かに存在している。これに対し、彼の後期の作品は、フランス語をネイティブ同様に聴けるとともに、画面に縦横無尽に登場する様々な引用を理解しうる教養人以外は決して寄せ付けない孤高の作品になってしまったように思う。

やや脱線してしまったが、本作では何を置いてもラストシーンを語らない訳にはいかない。未見の方もいらっしやると思うので詳細は避けるが、マリアンヌにも裏切られ、孤独を極めたフェルディナンが最後に取った衝撃的な行動、それに続くショット、そして、ダイアローグは、観客の心を掴んで永遠に離さないであろう。